



## ヨーロッパ旅路

丹羽恒夫

### 11. 南スエーデンの森林

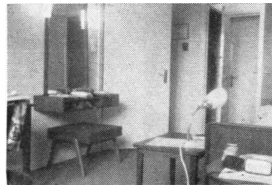
Vaxjo から帰ってみるとホテルが改装中であつたので、今迄の室から改装された室に移された。今度は奥の室で小さいが、前の室が大きいが古典的であつたのに比べてずっと近代的で、シングルベット化粧台付、机等の数は変わらないがバスルームは広く且トイレが別で、なかなか居心地はよい。ホテルの支配人は英語が通じないが人の良いおじさんで、いつもニコニコ顔で応待してくれる。

食堂は2階にあり、ここも英語は通じないが、メニューのスエーデン語はストックホルムで慣れたので食べるにはことかかず、結構楽しめる。乾杯の時、彼等は Skål (スコール) と云って呑む。

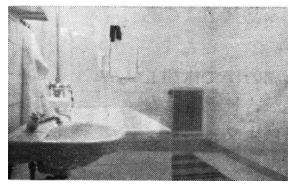
こんな町でもセルフサービスの食堂は

必ずあり、セルフサービスの店も2、3軒ある。

土曜日の午後には Ottosson 氏の家族と共に松林の中を散歩に、日曜日には Flink 氏と一緒に長靴をはいて地図を片手に山の中に入って見た。このあたりは全部平地林であり処々丘みたいなものがあるだけで、又湖沼が至る所にある。2時間位ドライブの後、自動車を降り森の中に入った。原始林はなく途中1ヶ所遠くからあれは原始林であると説明されたが、あとは純



ストラホテル内部左側ドアより浴室へ

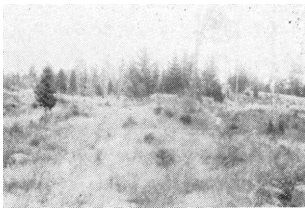


ストラホテル浴室

然たる人工林か天然生林である。

Spruceの稚樹もよく出ているようである。面白いのは山中所々に大きな石があり、名前がわからないが日本の庭に見られる円錐形の針葉樹があちこちに生えて居り、恰度大きな庭の様な感じがする所があちこちにあった。この石は何故あるかと聞いたがわからないとのこと、角が丸いので多分永河の残した石でないかと思う。民有地のせいか、所々垣根があり歩道、車道なども所々踏み切りみたいな棒を外して入ってゆくのだから始めは気になったが、なれるとあたりまえみたいになってくる。このように一般の人のために開放されるらしく、又開放してもあらされる心配がないのであろう。又ヨーロッパ特有の狩猟地があり、ここには沼あり川ありで動物がすみ易くしてある。

湖の傍で休憩したが、焚火をしながら生ソーセージを串ざしにして焼いて食べた味は忘



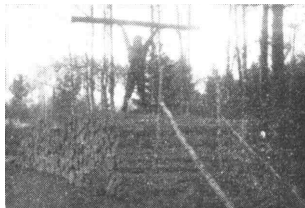
造林地



南スウェーデンの天然生林



人工林



バルブ用材  
(さし上げているのは9才位の子供)



林内歩道



湖の側で休憩

れ得ない思い出である。尚キウリの酢づけの味は漬物を思い出させ、魚の缶詰では生味の感じのするものがあり結構刺身のかわりに使用出来る。

再び林の中をドライブの後帰ってきたが途中の道はなかなかよく舗装され、田舎の舗装されていない横道でも道はよく、穴ボコ等はないので自動車のゆれも少ない。

ニプロの生活にもなれ、近くのカルマーの古城、古い教会、クラフトバルブの工場等も見てきたが、これを書くとき長くなるので、ニプロの生活記はこれくらいにしておきます。

## 12. スウェーデンより西ドイツへ

16日朝ニプロに別れをつけ Flink 氏の自動車でカルマーの飛行場へ、Flink 氏と固い握手をかわしてメトロポリタン機上の人となる。ストックホルムのプロマ飛行場に着いたのが約1時間後の9時30分である。次の予定地である西ドイツのDusseldorf 行のルフトハンザ機が午後4時10分発なので約6時間の間があるので、SAS の受付の女性に頼みこんで特別に荷物をさきに受け付けてもらい身軽になって出口に出た。

さてこれからと考えていたらタクシーの案内係がリムジンカー（と云っても普通のタクシーであるが）に乗らないかといつて来たのでそのまま乗り込む。隣に綺麗なお嬢さんが座ったので何と話をしようかなと考えているうちに中央停車場についてしまった。勿論途中に信号機もあるが、東京みたいにエンエンと車が並んで待つことがないので、たちまち着いてしまうのである。

ストックホルムの町に名残りを惜しみ、ニプロパンの公園で昼食をとっていたら、雀位の小鳥が遊びにきて残したパン屑を啄ばんで人を恐れぬ。再び SAS のタミナルからリムジンカーでプロマ飛行場へ。午後4時発の LH 211便で約2週間にわたるスウェーデンの旅を思い浮かべながらわかれをつけ遠く雲の彼方のDusseldorf に向った。機は途中 Hamburg に降りるが、私はデュッセルドルフ直行なので飛行場の待合室に出るだけであるが、出入国管理官の前にパスポートを出した時に、管理官は何かいったのであるが、たまたま同乗した日本人が隣の税関で申告でゴタゴタしていたのでそちらに気をとられて聞きもらしていたら、耳もとで変なアクセントの日本語で「チュウシャのシヨメイショ」とやられ、びっくり予防注射の証明書を出した。トタンにニヤニヤとされ照れてしまった。

ドイツの空港の待合室は A・B にわかれ、国際線は A に、国内線は B 待合室で待つのであるが、国際線が入ってきたので A ルームかと思ったらハンブルグ

からあとはデュッセルドルフで国内であるから Bルームで休憩することになる。始めわからないことと、ウツカリしてゲートパスをもらっておかなかったので、あやうく迷子になるところであった。早速受付でパスをもらい Bルームに移った。

ハンブルグの飛行場は飛行機と待合室の間をバスで乗客を運んでいる。危険防止のためかも知れないが僅かの距離を御苦労なことである。コペンハーゲン空港では待合室より飛行機の所までプラットフォームが長く続いていて、飛行機にすぐ乗り込めるようになっているのでバスは使用しない(たしか20以上ホームの出入口があったと思う)

デュッセルドルフに到着したのが午後 6時すぎである。ハンブルグで入国手続完了したのですぐ税関である。荷物を受けとって税関に行ったのは私だけで他の客は全部ハンブルグで入れ換ったか、Munchen 直行の客なので査査官 1人に私 1人とは気の毒みたいなものである。タバコはときいていたので面倒なのでカバンをあけたら、見ないでお茶とアルコールがあるか

ときいただけで無事通過した。ドイツでは特にお茶がやかましいそうで、税関は必ずタバコ、アルコールの他にお茶はもっているかとときいている。ハンブルグでそうであったがドイツから 3度出たり入ったりしたが、パスポートに 1回も査証のスタンプを押してくれなかった。誰か冗談にスタンプを押すとゴムが減るから押さないんだといていたが、押してくれないので入国した証拠にならない。

入口を出たらウェスタントレーディング KKの村上氏が迎えに出て頂いたので早速一緒にホテルに向う。ホテルは前もって予約してあったホテルだが、町の真中の賑かなデパートの傍で便利だが小さな割合に室料は高く、数日滞在するには懐工合のこともあり、明日村上氏の世話で他のホテルに移ることにした。

デュッセルドルフの町は人口約 70万のドイツで 4番目位の大きさの町であるが、附近は機械工業が発達しその中心地らしい活気のある都会である。(続く)